

長岡税務署長賞

税が託す未来

新潟県立長岡大手高等学校

三年 大野 心緒

高校進学を考えていた時、できれば公立高校にしてほしいと母に言われた。理由を聞くとうちにはお金がないからとのことだった。家に負担をかけるのは嫌だったから必死に勉強をしてなんとか公立高校に入れた。

しかし国や地方公共団体が公立の高校生一人あたり一年間の教育費に百万円も負担していることを知り、衝撃を受けた。私は学費を親にあまり負担をさせずにいると思っていたが、そのお金は消えたわけではなく国や地方公共団体が負担してくれているのだ。しかも百万円も。自分の知らないところで普通に高校に通っているだけに百万円が動いている。さらに小学生一人あたり八十八万円、中学生一人あたり百五万円を負担していることが分かった。つまり高校生に限らず子供の頃から国や地方公共団体に支えられて学校生活を送っているのだ。今まで私が負担しなくて良かった分は税金でまかなわれていることは知っていたが、改めて数字で出されると戸惑ってしまう。

そして強い責任感を持たなければいけないという気持ちと

未来への希望を感じた。毎年国債が増えているのにも関わらず、将来世代の負担とならないように様々な努力をしている。またこの状況で私達に多額の融資もしている。つまりこの国や世界の未来を私達に託しているということではないかと感じた。

二〇二一年、地球には様々な問題がある。それは今すぐ解決するのは難しい。しかし次の世代の人との間で新しく何かを始めたり、少しずつでも何かを変えることでいつか解決できる。やり遂げることができる。国が税金を私達に使うことで未来を託している。もちろん解決するのは簡単なことではないが、自分は今、未来を託されているという誇りを胸にやらなければいけない勉強や部活を必死に頑張ることが大切だと感じた。

また私の住んでいる長岡でも小林虎三郎という、未来を次の世代に託した偉人がいた。戊辰戦争で敗戦後、焼け野原となり、困窮していた三根山藩から米百俵が見舞いとして送られてきた。藩士たちはこれを食べようと喜んだが、藩の大惨事小林虎三郎はこの百俵の米を売って、書籍や器具の費用にした。辛い中、目先のことだけを考えず、未来のために行動しているところが今の日本と似ていると感じた。米百俵で建てられた国漢学校の新校舎によって後の新しい日本を背負っていく人物が多く生まれた。つまり今の日本を新しく生まれ変える人が生まれるということなのではないかと思う。

たまに学校を休みたい日や何もしたくない時もあるが国が未来のために私達を応援しているのだと思うと、背中を押されたような気がして、頑張れる気がしている。